

Muse

帝国データバンク史料館だより【ミューズ】

2009.02
VOL.07
TDB Historical Museum

信用調査機関で作成した調査報告書の
評価手法も、時代の変化や顧客のニーズ
に応え、繰り返し改訂が重ねられてきた。

古往今来〈特別論談〉

くずし字の向こう側に見えるもの

東京都公文書館 整理閲覧係 専門官 中元 幸二さん

TDB交親録 ゆかりの人物 ― 交流と親交の記録

小説家「山本周五郎」

日本の産業創世記

産業近代化の先陣 [製糸業]

シリーズ：史料との対話

調査報告書に見る 評価の変遷

特別論談

くずし字の 向こう側に 見えるもの



東京都公文書館
整理閲覧係 専門官

中元 幸二さん [なかもと こうじ]

1964年生まれ。88年、立正大学文学部史学科卒業、ついで91年、同大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了。90年4月より東京都公文書館非常勤職員、現在に至る。資料保存、都市史研究など著作・講演活動など幅広く活躍中

1 くずし字に出会う

くずし字解説講座が人気 各地の博物館・公文書館で開催

くずし字は私たちの生活の場でも見ることが出来ます。「おてもと」という箸の袋に書かれた文字。これは「御手茂登」という漢字をくずしたもので、お寿司屋さんなどでよく見かける、だれでも知っているレベルのものです。また、祖父母が書いた手紙が達筆で読めない、ということがあります。

現在、各地の博物館や歴史資料館などでは古文書の解説講座が開かれていて、どこでも満員御礼の状況です。抽選に通らなければ受講できない活況ぶりです。

博物館

に行けば

くずし字

で書かれ

た展示物

が置いて

あります。

その脇に、



所蔵先、タイトル、解説が記されていますが、親切なところでは現代文に書き直した「釈文」(しゃくもん)が小さな文字で書かれています。展示物を見れば他のものも見なくなりませんが、博物館は展示はしても簡単に収蔵物が見られる機関ではありません。史料が閲覧できる機関のひとつに公文書館があり、基本的には史料を閲覧できます。しかし、それをスラスラ読めるのかというと、なかなか難しいものです。そこで、自分で読めるようにならないか、というニーズがとにかく高くなっています。すぐには読めるようにはならないけれど、読むための手引きはできるだろうということで、博物館や公文書館ではくずし字解説講座を開催しています。

2 「くずし字」とは

古今東西に共通したルール 字体を読み、意味を読み取る

書道で文字を書くときには、書き順はこうで、ここでははねて、ここで止めて、といった書き方のルールつまり約束ごとがあります。文字のくずし方にもルールがあって、このルールに従

わないと相手に伝

わりません。無視す

ればそれは文字で

はなく、勝手に記

号を書いているとい

うことになりかね

ません。ルールを知

らなければ、くずし



『五體字類』

字を読むことはできないのです。外国語の学習と似たところがあつて、読むには辞書が必要です。辞書にはふた通りのもがあります。ひとつは筆の入り方の順序から検索するもの(「くずし字解説辞典」)。もうひとつは、漢和辞典と同じように、部首を使って「扁(へん)」「旁(つくり)」で引くもので、史料から集字した「近世古文書解説辞典」などがあります。このタイプには、『五體字類』のようにくずし字を読むためのものではなくて、書道家が字を書くときの手本書もあります。書はもともと中国から来ていますので中国の古くからのくずし字が入っています。例えば、晋時代に活躍した書聖と言われる王羲之の書の字体がきれいだと言われています。日本では、江戸時代に書かれた文字は一般的に「お家流」と言われる草書体のくずし字で書かれていました。

結局、文字には書き方のルールやスタイルがあつて、青森の古文書も福岡の古文書も同じルールで読めるのです。

1872(明治5)年の太陽暦採用以前は陰暦の閏月(うるうつき)を使用していました。「閏」という字のくずし字は千支の「王」(みずのえ)と同じ形です。従って、このくずし字が

出てきた場合は、「閏月の「閏」と読むのか干支の「壬」と読むのかは、読む人の判断によって決まります。

くずし字はくずし方にルールがあるのと同じように、どういった意味でその字を使っているのかが分からないと、見当違いの読み方をしてしまう。くずし字そのものをまず文字として読み、どの局面で何のために使われているのかを理解することが大事なのです。

3 くずし字を読む

手紙や帳簿は歴史の痕跡 その発見がくずし字の醍醐味

くずし字で書かれた古い文書は、古文書（こもんじよ）と古記録（こきろく）に大別されます。古文書の代表的なものは手紙です。また、古記録とは個人の日記や店などの帳簿類のことで、様々な記録が残されています。

手紙の場合、現在と同じように差出人と受取人との関係で書き方が違ってきます。授受関係を基本に読み取るのです。こういう場合には、こういう文字の使い方をするというルールが存在していて、相手の呼び方や言葉の使い方などから両者の関係や局面を読み取ることが出来ます。くずし字の字体だけでなく、その1通の手紙がどう成立しているかを知ることが、史料として読み進めることができます。

古記録は文字通り記録ですから、様々な事実の発見につながります。数字が羅列してある帳簿のような記録から食材や調味料などを知れば、当時の暮らしが浮かびます。村の名

主の家に残っていた帳簿からは、年貢や租税の徴収の状況が分かります。

また、老舗には秘伝の製法とか当主の日記、得意先からの注文記録など、外部には出さなかつた史料が残っていることがあります。これは他人に読ませるためのもではないため、書き留めた簡易メモのようなものも多く、解読するには困難が伴いますが、例えばくずし字で書かれた材料や配合が分れば、当時の製法を再現することができるなど、解読という作業の可能性が広がっていきます。

このような史料を読むときにはもちろん、字体のくずし方が分かなければ所詮は読めないのですが、なぜその文書が作成されたのか、という背景や使用目的が分からないくずし字を読んで理解したことにはならないのです。史料にどのような存在意義があつたのかを知ることが重要になるのです。

4 くずし字を残す

民間に眠っている貴重な史料 解説を進めて収集・保存を

明治時代以降、博物館が出来はじめてモノを収集展示するようになりました。しかし、最初は古文書などについては、歴史上の著名



例(明治7年飛信通送規則)
佐賀の乱をきっかけにした最初の軍事通信制度。受講者の書き込みあり

な人物にかかわるようなものは別として、一般のものを集めてきて公開する、

ということはありませんでした。

東京では行政資料や民間資料の多くが関東大震災や空襲で焼失してしまいました。戦後は村などに残ったものを発掘・保存する動きが出て、民間資料の収集・保存事業へとつながっていきました。これらの資料の保存場所のひとつとして公文書館が作られてきたのです。現在、公文書館でもくずし字解読講座を行っているのは、一般の方々が読めるようになることで、まだ旧家の蔵に眠っているような新たな資料を発掘しようとする意図もあります。

個々の企業や個人が持っている文書や記録も重要な資料です。こうした資料が確保されて全部読むことができれば、歴史を埋めることにはならないとも言えます。また、一般の家や企業に残る資料は、くずし字が読めないために意味や価値が分からず、処分されてしまう危険性も高く、早急な手当てを考えていかなければいけないという問題があります。

家に残っているものや、行政で使われた資料は日常の痕跡が記された生の資料です。あの土地にこんなものがあるとは知らなかつた、写真にも残っていないし、年表にも書かれていない、そういった痕跡を歩いて発見す

るとは別に、文書から発見することが出来るのです。企業に残る資料でも同じことが言えると思いますが、そこが一番面白いところではないでしょうか。

しかし、そうした資料がだんだん少なくなっていくつあります。和紙に書かれた文字はこの先もずっと残っていく公算が強いのですが、近代以降の洋紙に書かれた文字の場合は和紙ほどもちません。解読される前に消えてなくなる可能性の方がずっと高いのです。

そして、世代が進めばその史料が書かれた背景を知る人も少なくなります。これは新しい時代に近いほど切実な問題です。古今を問わず、貴重な資料があつても何のために書かれたのか分からない、つまり利用できないということが起きないために、くずし字を読むことに意味があるのです。



昭和を代表する小説家・山本周五郎。
『縦ノ木は残った』『赤ひげ診療療』『青べか物語』など、そこに描かれた人間模様は多くの映画、TVドラマ、舞台でも人気を博してきた。
その周五郎は大正末期から昭和初期の約4年間、帝国興信所に勤務していた。この20代前半の周五郎自身の人間模様を辿る。

帝国興信所勤務時代に 弱冠23歳で文壇デビュー

山本周五郎、本名清水三十六(さとむ)は1903(明治36)年、山梨県に生まれた。16(大正5)年、横浜の尋常西前小学校を卒業と同時に、東京・木挽町(現、銀座2丁目)にて質店「きねや」を営む山本周五郎商店に徒弟として住み込む。23年9月の関東大震災により「きねや」が被災、解散し、兵庫県神戸市に転居。翌24年に帰京し、帝国興信所に入所した。
在職中の26年、『文藝春秋』4月号に『須磨寺附近』が掲載されて文壇出世作となったが、この頃からペンネームを「山本周五郎」としていた。徒弟として勤めながら正則英語学校や大原簿記学校に通わせてくれた恩人、「きねや」の店主にあやかったものである。
28(昭和3)年10月、周五郎は解雇を通告

小説家

山本周五郎

創作、失職、失恋、貧窮。

青春時代の雌伏の1ページに、帝国興信所。

される。25歳の時であった。ここから生活は極めて貧窮し、失恋の痛手をも負うのだが、まだ無名といつていい文学青年はこの後、再び定職に就くことなく文学と格闘を続け、15年の月日を経た43年、第17回直木賞に『日本婦道記』が推薦されて文豪としての道を歩み始める。
なお、周五郎はこの直木賞も、『縦ノ木は残った』(59年)で推薦された第13回毎日出版文化賞も、『青べか物語』(61年)での文藝春秋読者賞もことごとく受賞を拒み反骨の人としても知られる。

雑誌『日本魂』の編集を担当 熱血漢、豪傑の一面も

1924(大正13)年8月25日付帝国興信所社内報『脱俗』に、周五郎が青年団主催の白馬岳登山に参加したという記事が載っている。神戸から帰京したのが同年1月であったから、この7か月ほどの間に入所していたことになる。
帝国興信所も関東大震災により本社屋が倒壊。23年11月に木挽町にあった創業者後藤武夫の自宅跡に事務所を設けた。周五郎の最初の勤務地はここであったが、奇しくも木挽町は質店「きねや」があった場所である。



周五郎の母の訃報 1926(大正15)年10月25日付『脱俗』。周五郎は文書課に勤務していた

白馬岳登山 周五郎は帝国興信所青年団の活動に積極的だった。これは1924(大正13)年8月、青年団主催の白馬岳登山の記念写真(前列最右が周五郎)

26年10月25日付『脱俗』の記事で周五郎の最初の配属先が文書課であったことが分かる。この記事は10月20日に周五郎が母・とくを亡くしたことを伝えるものであった。しばらくして後藤武夫が結成した思想結社「日本魂社」の機関誌『日本魂』の編集部に転属となる。以降は編集者として『日本魂』の出版に携わるのである。
当時の仕事ぶり、暮らしぶりはどうであったか。以下はかつて帝国データバンク百年史編集室が山本周五郎研究・評論の第一人者であった元青山学院女短大教授、木村久邇典氏(故人)に聞いた話である。



写真提供：共同通信社

「任んでいた板橋の板新町から木挽町の日本魂社まで徒歩で出社していました。勤務態度は入社数年間は普通の人以上に精励恪勤だったのではないのでしょうか」
「ぼくの名前は三十六なのに、給料はそれよりも低い三十五円だった、と話していました。(略)中学も満足に卒業していないのに、優遇されていたことになるでしょうね」
他にも、「机の下に『升瓶』をおいて原稿を書いていた」「昼食は毎日出前を取って、代金が天引きされた給料袋は赤字だった」といった豪傑ぶりを語るエピソードもある。
一方、仕事では編集者として頻繁に取材活動を行っていた。後年、『青べか日記』として出版されたノートに、周五郎が取材した人物が登場している。以下は28年8月に記されたものである。
「安藤広太郎博士を訪ねた。親しみ易い人だ」
「今日は八月三十日である。藤田靈齋に会った。人間であった」
「池部釣にデッサンを見せに行った。好評であった」
「二十四日には佐藤鉄太郎中将に会った。(略)帰りには玄関まで送り出し、余の為に傘の心配までしてくれた」
また、「俵屋宋八」のペンネームで『日本魂』に作品を連載していた。この名は周五郎が『風神雷神図屏風』を描いた画家「俵屋宋八」に傾倒しており、「宋達」を「宋八」としたものである。現存する『日本魂』からは、次のような作品が確認されている。「永代橋昔話(八幡例祭の椿事)」、「芝居の今昔」、「如林寺の嫁(怪談)」、「亭主紛失事件(怪談)」、「雪の綺談(雪女郎、交通奇談、雪科学の今昔)」、「宗太兄弟



『青べか日記』
1928(昭和3)~29(昭和4)
年の浦安時代の日記を編集・
出版。若き周五郎の公私にわた
る苦闘の日々が綴られている

『青べか日記』が語る苦難と苦闘 浦安時代は雌伏の1ページ

1928(昭和3)年7月、周五郎は千葉県浦安町に転居した。前述した『青べか日記』は翌月8月12日に開巻する。その初日の日記に「(略)よき眠りがあるだろう。静子よ、末子と余を守ってお呉れ」と、ふたりの女性が登場す

の悲劇(敵討後日談)」。当時23~24歳の若き周五郎はすでに小説家であったことが窺える。さらに、周五郎は仕事の傍ら様々な活動や行事にも参加していた。前述のように、24(大正13)年の入社当時から青年団に加入し、白馬岳登山にも参加しており、26年3月25日付『脱俗』によれば青年団春季総会において、団長が不慮の災害を受けたとの報告に接し「団長御見舞の件」を緊急提議したとある。周五郎23歳の熱血漢ぶりだ。2年後、27(昭和2)年の春季総会では役員改選が行われ、周五郎が第1班、大石良興(赤穂義士・大石内蔵助の末裔)が第2班の班長に選出されている。この年にはまた青年団の「雄弁春季大会」に7人中の3番手として登場し、熱弁を振るった。演題は「焼豚の話」というから、異色ではあったものの大いに会場を沸かせたことは想像に難くない。

こうしてみると、入社3年目までの周五郎は充実した日々を過ごしていたように見える。

る。木村久邇典著『山本周五郎(青春時代)』によれば、静子とは「きねや」の長女・志津子(大正15年10月4日死去)であった。末子は『日本魂』の編集次長・彦山光三の夫人の妹・中川末子である。この年の初夏、郷里静岡から上京していた末子に周五郎は焔のような恋を感じた。周五郎25歳、末子は17歳の少女だった。8月15日の日記に、「昨日は末子の家を訪ねた。(略)殆どもう婚約はできた」とあるが、この恋は実らない。

そのひとつの理由として、木村氏は「浦安移転以来、にわかに入社時間もおくれがちになった勤務状態が、社内でもひんしゆくのものになっていて、それが彦山氏にも反響していたのかもれない」と著している。

浦安での最初の下宿先は蒸気船が発着する蒸気河岸にあった。ここで乗船して終着地点の東京深川の高橋まで、所要時間はどれほどなのか。木村氏によれば「およそ2時間半」であるが、蒸気河岸で当時から船宿を営む「吉野屋」の店主・吉野真太郎氏に話を聞いたところ、「ここ江戸川から新川、荒川、小名木川、隅田川を経由して、天候にもよりますが、1時間半くらいではなかったでしょうか」とのことだった。「吉野屋」は後の傑作『青べか物語』に「船宿・千本」として登場している。

高橋までが、1時間半としても始業時間は午前8時半であったから、高橋からの所要時間も考えれば通勤時間はやはり2時間半程度である。午前6時に乗船すれば始業時間には間に合うはずであったが、遅刻・欠勤など、



蒸気河岸 江戸川河口にあった蒸気船の発着所。左奥が定期蒸気船。昭和初期の写真で、周五郎はこの船に乗って通勤していた

勤務態度が悪くなり28年10月25日付で解雇となった。後藤武夫は出退勤の刻限にこのほか厳しく、会社として措置であったが、周五郎は窮地に追い込まれる。『青べか日記』の

10月24日の項にはこう記されている。

「略余は勤務先からの通知で職を逐われた。大きな打撃で少し参った。(略)二十二日の昼間徳田秋声先生を訪ね、原稿のこと、勤口のことなど、浅い馴染にも不拘(かかわらず)頼んでみた。(略)余は挫けはしない。何者と雖も余を挫くことは出来ない。愈々背水の陣か? 呵々」
失職の原因となった勤務不良はなぜだったのか、『青べか日記』から推察できる。

「今日は寝呆けた。それで社を休んだ」
これは8月28日の日記だが、22日の項では、小説「動かぬピストン」にとりかかったとあり、この原稿は会社を休んだ28日まで15枚を書き進めている。勤務不良は多分に創作活動が影響している。事実、浦安での文筆はすさまじかった。8月以降、翌29年7月までの1年間に周五郎が構想し、執筆を始め、あるいは完稿した作品を『青べか日記』から抽出すると、「鬼ヶ峠」「灰焼場の男」「武蔵逃亡」「浦島」「批評家と痛風」「砕けたタムラン」「麦藁帽子」「田沼意次」「巨勢教授の実験」「画師弘高」「春はまた丘へ」

など、その数は30作に迫り枚挙にいとまがない。しかしこの間、収入は殆どなく生活は貧窮を極め、29年(大正4)年1月31日の日記に記されたように中川末子が「遂に余の手を飛び立った」。

同年9月22日、閉巻を迎えた『青べか日記』にはこう書き記されている。

「凡ての計画は破れた。余は浦安を猫(か)わうそ)のように逃げる。多くの嘲笑が余の背中に投げられるだろう」

この『青べか日記』のクライマックスを、木村氏は前述の著作『山本周五郎(青春時代)』で「貧窮と飢餓と疾患と失恋と失職に打ちひしがれた無名の文学青年が(略)いかなる困難にも屈せず、自らに鞭打ち続ける真剣な文学との格闘のすさまじさ」だと語っている。

浦安転居に前後する編集記者時代と、その後の苦闘の日々は後の小説家・山本周五郎を形成した雌伏の1ページであった。浦安を去ってから30年後、周五郎は再びこの地を訪れて船宿「吉野屋」の先代店主・吉野長太郎と再会を果たす。少年時代の長太郎は『青べか物語』に数少ない理解者「長」として登場する。吉野屋はまた、周五郎が失職した直後、約3カ月間の下宿先でもあった。現店主・眞太郎氏によれば、今でも周五郎ゆかりのこの船宿に、江戸川散策のついでに、あるいは地方からも訪れる人が絶えないという。



撮影：林忠彦氏
『青べか物語』の登場人物と再会
浦安を脱出した30年後、周五郎は
再びこの地を訪れ、当時は少年だ
った船宿「吉野屋」の長太郎(『青
べか物語』に「長」として登場)と再会した

製糸業

産業近代化の先陣



錦絵「上州富岡製糸場」(明治5年)

開国と維新を経て、
明治政府は殖産興業を推進し
産業の近代化をなし遂げて行く。
その先陣を切ったのが製糸業であった。
日本にすでに生糸王国の姿はないが、
かつて辿ったシルクロードの先に、
今日の経済大国日本がある。



富岡製糸場 1872(明治5)年、我が国初の官営工場として操業を開始。
その目的は近代的西洋器械製糸の導入と指導者(伝習工女)の育成にあった

フランスから近代技術を導入 我が国初の官営工場「富岡製糸場」

1859(安政6)年、日本は二百数十年間に及んだ鎖国を解き、横浜、長崎、函館の3港を開いて欧米諸国との貿易が始まった。今年が開港150周年に当たる。

当時は居留地に本拠を置く外人商館との「商館貿易」であったが、その中心となったのが生糸である。その頃、フランスで発生した蚕病により、欧州の蚕業は壊滅的な危機に瀕し、日本から持ち込まれた蚕種(蚕の卵)が強健であったことから、以降、蚕種や生糸の輸出が盛んになっていく。

68(明治元)年、誕生した明治新政府は「殖産興業」「富国強兵」により欧米資本主義に對抗するため、すぐさま産業の近代化に着手

した。その先陣を切ったのが製糸業である。当時は家内工業的な「手紡ぎ」「座繰り」であり、品質も粗悪であった。政府は外貨獲得の主力であった製糸業の近代化を図るべく、71年、模範工場として我が国初の官営工場「富岡製糸場」の建設を始めた。目的は、西洋式器械製糸の導入と、指導者の育成であった。

建設にはフランス人ポール・ブリューナが招かれ、器械繰糸機もフランスから輸入された。竣工は72年7月、開場は同年10月。操業にはブリューナ他10人のフランス人の指導の下、404人の日本人工女が当たった。その品質は極めて良好で、教育した工女は4年間ほどで約2千人に上り、これら伝習工女たちは各地で器械製糸の普及に携わり、やがて日本は世界一の産出輸出へと急速な成長を遂げる。



フランス人指導者 後列最右がポール・ブリューナ

明治42年、産出・輸出世界一に 日本の近代化を支え続けた製糸業

富岡製糸場は93(明治26)年、三井家に買下げられ、1902(明治35)年には原合名会社に譲渡。さらに、39(昭和14)年に片倉製糸紡績株式会社(現、片倉工業株式会社)に合併され、87(昭和62)年3月に115年にわたる操業を停止している。

日本の製糸業は太平洋戦争に突入した1941(昭和16)年頃まで、生糸の生産と輸出を増大させていった。明治から昭和初期までの輸出額の実に70%から40%を占めており、この約70年間の国力と経済力増大の中心に製糸業があった。その経緯はどうであったのか。

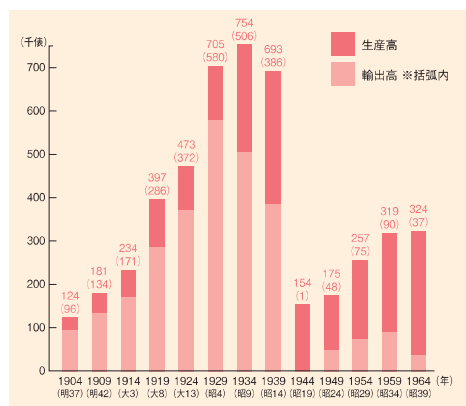


御法川式繰糸機（大正初期）
片倉製糸は御法川直三郎が発明した多糸繰糸機の
実用化に成功。高級生糸の量産と輸出に貢献した

富岡製糸場の開場から数年後には、群馬や長野で小規模の器械製糸業が興る。日清・日露の戦勝期には政府の産業振興、輸出奨励策もあり、輸出は増大していく。

また、大規模経営による製糸業の台頭も見逃せない。1873（明治6）年、長野県諏訪郡で座繰糸系を開始した片倉市助から始まる片倉財閥は、78（明治11年）に洋式器械製糸「垣外製糸場」を興したのを皮切りに、県外・県外に次々と近代的製糸場を開設していった。関西でも96（明治29）年、郡製糸所（現、グンゼ株式会社）が設立され、また、群馬の碓氷社に代表されるように最盛期には3万もの養蚕農家を組織した製糸組合も増産や品質改良により輸出用生糸の生産に貢献した。

こうして1909（明治42）年には産出量、輸出量ともに中国を抜き、日本は世界に冠たる生糸王国となった。そして大正期には最盛期を迎える。第二次世界大戦（14〜18年）後にアメリカへの輸出が急増する。養蚕業も製糸業も空前の好景気に沸いた。当時、日本の生糸生産高は世界の過半数をも占めていた。



生糸生産高と輸出高の推移（1966年ダイヤモンド社刊、『産業フロンティア物語 生糸（片倉工業）』より）

生糸が織りなす人間模様 女性たちが開いた近代日本

当初、富岡製糸場に工女たちは集まらなかった。「異人に生血を絞られる」。フランス人が飲むワインを見て、そんな噂が流れたからだ。そこで初代工場長尾高惇忠は13歳にも満たない長女「ゆう」を郷里の深谷から工女第一号として呼び寄せた。また政府は士族の娘の入所を促したが、その中に長野県松代の士族・横田数馬の二女「英」がいる。英は同郷の16人の女工を連れて入所した。技術を習得して約1年後には松代での器械製糸を指導するため帰郷した。後に追憶した『富岡日記』には、操業の様子や、「繰場入り」で新参の長州（山口県）の工女たちに先を越された話など、人間模様も織り交せて記されており、興味深い。

全国各地の製糸場で繭を選別し、煮繭から糸をとり、切れた糸をつなぐ繊細な仕事は女性に委ねられた。明治から昭和初期まで、最大の輸出製品であった生糸の生産を女性が支えていたことは特筆できる。

この労働に大手製糸家は福利厚生や地域貢献で報いていた。片倉製糸の初代社長・片



片倉兼太郎（二代）
初代社長として片倉製糸を国内トップ企業に成長させた

横田 英
長野県松代から富岡製糸場に入所。後、故郷で繰糸の指導にあたり、また、『富岡日記』を残した

倉兼太郎（二代）は欧米視察で目にした文化・福利施設に感銘し、諏訪湖畔に温泉大浴場を備えた保養施設「片倉館」を建設したほか、工女や地域の教育事業を推進した。郡製糸も工女教育のための郡是女学校や地域のための郡是病院を設立している。典型的な労働集約産業であったゆえか、製糸業から労使共生の精神が生まれていたことも見逃せない。



工女の社員教育 大手製糸会社は社員教育に努めた。写真は片倉製糸での「生け花」の様子

製糸業の足跡を遺し、伝えるために 近代化産業遺産、世界遺産として

2007（平成19）年11月、経済産業省は33件の「近代化産業遺産群」とそのストーリーを認定した。その趣旨は「地域において、先人の歩みを知り、将来にわたっての活力に繋げていく」というもの。製糸業も旧富岡製糸場、碓氷社、片倉館、グンゼ記念館など6県にわたり40件余の資産が認定された。

また、旧富岡製糸場は07年1月、ユネスコ世界遺産暫定リストに記載され、現在は厳格に保全・保護されている。繰糸場、繭倉庫など主要な建物は明治初期の開場当時のまま残っており、そこに立つと往時の工女たちの心情までもが偲ばれる。

こうした産業遺産とともに、製糸業が描いた今日の日本に続く産業の軌跡と、先人たちが紡いだ足跡を次代に語り継いでいくことが肝要だ。

かつては文言で表していた 信用調査機関の「評価」

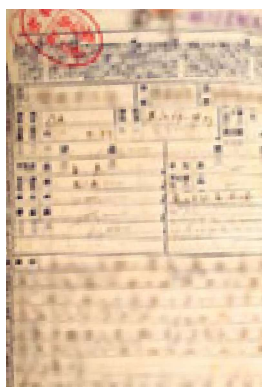
1896(明治29)年に設立され、戦前まで三大興信所のひとつに数えられていた「東京興信所」の調査報告書が埼玉県立文書館に所蔵されている。1929(昭和4)年から40年まで、昭和初期作成の約30通が確認された。これによると同社の調査報告書では、「信用程度」と「評判諸払」の2項目において調査結果を反映させた評価が記されている。

「信用程度」部分の評価方法については、調査報告書の第1号用紙(1枚目)の端書きに次のような注意事項が書かれていた。

「信用程度の順位はAaBaCaDaEaの記号を以て五段に分ちAaは最も信用多きを意味し以下順次其程度を示すものにして此報答文へは右記号を以て其順位を記載せり。またFaは手形の不渡となりたる為め銀行より取引停止処分を受け現在停止中のものなり」

一方、「評判諸払」の項目は、「信用程度」で見られるAa~Eaのような段階的な格付ではなく、文言により評価が記載されていた。ここ

1929(昭和4)年の調査報告書(東京興信所)「信用程度」と「評判諸払」の2項目に調査結果を反映させた信用調査機関の評価が記されていた



埼玉県立文書館収蔵
(埼玉銀行文書99-14)

シリーズ | 史料との対話 |

調査報告書に見る 評価の変遷

信用調査機関では基幹となる信用調査業務において、調査結果を依頼先である顧客に報告するために調査報告書を作成している。その内容や書式の改訂は、顧客のニーズ、時代の変化に対応して繰り返され、現在に至っている。

今回は、帝国データバンク史料館がこれまでに収集した資料を基に調査報告書、特に調査結果の総合的な評価方法の変遷について紹介する。



に書かれる文言は、「評判宜シ」「悪シカラサル由ナリ」など同程度の評価であったも調査報告書ごとに表現の違いが見受けられた。

また、これら3つの評価項目は主に企業概要が記載される「第1号用紙」に明記されているものと、本文中に書かれているものが混在していた。このことからまだ書式全体の統一フォーム自体が定まっていなかったことが窺える。

なお、当時の東京興信所では、個人の信用評価を掲載した『商工信用録』を出版していた。ここでは「評判諸払」の項目はなく、「信用程度」の項目だけで調査報告書と同様の段階的な格付による評価が行われている。「評判諸払」は調査報告書独自の評価項目だったのである。

総合的な評価を明記 帝国興信所独自の「所見」

同時期に帝国興信所で作成した調査報告書を見ると、摘要紙と呼ばれる「第1号用紙」において「信用」「盛衰」およびこれらの項目を総合的に評価した「当所の所見」の3項目に評価が記されている。帝国興信所では1913(大正2)年以降、報告書の書式を統一したため、全ての報告

1926(大正15)年の調査報告書(帝国興信所)調査における評価を記した「信用」「盛衰」の2項目に加えて、「当所の所見」の項目で総合的な評価結果が明記されていた



書が同書式にて報告されている。そのうち「信用」「盛衰」は段階的評価で示され、同時期に出版していた『帝国信用録』における評価と同様の方式であったが、「当所の所見」は、調査報告書独自の評価方法であった。またこのような総合的な判断を下す評価項目は東京興信所の調査報告書には見られない項目である。「当所の所見」は、26年以降、「警戒を要せざるものと認む」「注意を要するものと認む」「警戒を要するものと認む」の3種類いずれかで明記された。

「帝国興信所の創業者・後藤武夫は、自伝『後藤武夫伝』において、先発興信所である商業興信所と東京興信所の報告書について両者とも要領を得ず徹底しないと批判した上で、「当所の所見」欄について次のように述べている。

「警戒の要あり、要なしとの断定を附するは、一面から見れば危険なやうであるが、苟も他人の財産信用を調査することが専門的であるからには、これしきの勇氣と確信がなければ到底出来ないことである。現在我所の調査報告書に用ひて居る謂はゆる『當所の所見』なるものは恰も名判官の如く權威あるものであらねばならぬのである」

当時の調査報告書については、社内で頻繁に議論が繰り返され、様式の統一と内容の充実が図られていった。また曖昧な表現、分かりづらい表現などを排除するように注意を促し、問題点の改善に取り組んでいったのである。こうしたなかで戦後には、評価方法について



『後藤武夫伝』 1928(昭和3)年に発刊された帝国興信所創業者、後藤武夫の自伝。自身の生い立ちだけでなく、「当所の所見」の在り方や信用調査機関としてあるべき姿なども記されていた

も見直しが進められ、従来型の主観的な総合評価に客観的な要素が加えられた評価方式へと変化していった。

主要信用調査機関が次々採用 スタンダードになった「評点方式」

昨年、帝国データバンク史料館では、自社及び他の信用調査機関で作られた昭和期の調査報告書613点を入手した。これらを持

代ごとに並べてみると、1955(昭和30)年を境にして、各社の調査報告書に「評点方式」を採用しているものが散見されるようになってくる。

「評点方式」とは、総合的な評価をより客観的に判別するために重要項目の評価を点数化し、その合計点数で企業の信用程度を表したものである。今回入手した資料のなかでこの「評点方式」を最も早く採用しているのは、55年に東京商工興信所(現・東京商工リサーチ)で作成された調査報告書である。同時期に他の大手信用調査機関で作られたものは、戦前と同じように評点を用いず総合評価を文言もしくは文章で記述しているところが大半であった。当時、帝国興信所も「当所の所見」を4種類の文言から選択し、「所見の根拠」を1200字程度の文章で記載する総合評価方式を採用していた。帝国興信所が「評点方式」を導入するのは58年である。また翌年の59年には、信用交換所も「評点方式」を採用したことが同社の『創業十五年の歩み』に記載されている。

1950年代後半から、大手信用調査機関が次々に「評点方式」を取り入れる中で、最古参の東亜興信所(44年に東京興信所と商業興信所が合併)は、最後まで文言による評価のみの記載にとどめていた。しかし、70年頃までには同社も「評点方式」を採用。主要な信用調査機関のほとんどが「評点方式」を取り入れたことで、客観的な要素の強い評価方法が調査報告書のスタンダードになっていった。

1960年代前半の大手信用調査機関の評価項目

東京商工興信所 作成年：1962(昭和37)年		帝国興信所 作成年：1964(昭和39)年		信用交換所 作成年：1963(昭和38)年		東亜興信所 作成年：1962(昭和37)年	
評価項目	配点	評価項目	配点	評価項目	配点	評価項目	配点
業容	経営評価 10	経営者信用 10	経営能力 10	人格 経験 10			
	業歴並 立地条件 5	業歴 5	業容 5	業歴・社格 8			
	既往業績 5	既往の業績 5	業績 8	既往 8			
営業状態	得意先関係 10	取引関係 8	業容 13	取引先 13			
	商品市場性及採算性 5	採算現況 10		銀行信用 7			
金融状態	対行信用 10	資金現況 16	資本構成 12	資金繰り 12			
	資金繰り状況 15	資本構成 12	業績 12	財務内容 12			
経営活動	資産状態 15	業容 12	業歴 10	現況業績 10			
	業況 15	将来性 10	経営能力 12	将来性 12			
	将来性 10	総合世評 12	総合世評 8	総合世評 8			
	—	減点 -10	—	—			
合計	100	合計 100	合計 100	合計 100			
格付け	1~5段階評価。 規模別にAA~Dの5つに分類	格付け	A~Eの5段階評価	格付け	警戒を要しない さしあたり警戒を要しない 多少注意を要する やや警戒を要する 警戒を要する	格付け	金融常態(円滑、常態、多忙、 逼迫、波鋭)の5段階 信用程度(厚、稍厚、普通(上・中・下)、 稍薄、薄)の7段階

「評点方式」を導入当初の 帝国興信所と東京商工興信所

では、初期の「評点方式」の仕組みとはどのようなものであったのだろうか。1955(昭和30)年に東京商工興信所で作成された報告書の第1号用紙(1枚目)を見ると、主要項目の点数が記された「総合信用格付表」と、点数化した数値を評価する「企業別符号」[「総合信用格付基準」が掲載されていた。

「総合信用格付表」は、主要な項目ごとに配点と当該調査における点数が書かれている。採点対象となる項目は、「業容」「営業状況」「金融状態」「経営活動」の4つの要素からなり、さらに細かく10項目に分類される。「企業別符号」では資本金、従業員数により「大企業」「中企業」「小企業」「零細企業」に区分けし、この評価項目ごとの点数を加算した総合点と「企業別符号表」の区分を「総合信用格付基準表」に照らし合わせることで、最終的な評価が判別できるようになっている。

この調査報告書と帝国興信所が「評点方式」を取り入れた年に作成したものを比べてみると、東京商工興信所が会社規模と総合点数の2段階で評価し



東京商工興信所の調査報告書(1955年)
「総合信用格付表」の総合点と「企業別符号表」の区分を「総合信用格付基準」に照らし合わせ、最終的な評価を判別していた

ているのに対し、帝国興信所の「信用程度」はA~Eの5段階評価であり、会社の規模や業種などは採点時に反映され、総合点に取り込まれている。



東京商工興信所(1955年)と帝国興信所(1958年)の総合評価部分
「評点方式」採用時の総合的な評価の判別方法は、東京商工興信所と帝国興信所で違いが見られた

各社各様、ニーズに合わせて 評価基準も明確に

70年代以降、客観的な評価方法として「評点方式」が定着していくなかで、評価するポイントや見せ方に信用調査機関ごとの違いが見られた。80年代に前後して作成された各主要信用調査機関の調査報告書を見てみるとその独自性は明確である。

評価項目部分では「評点」採用時から変化が見られないものの構成点の配分を調整

している帝国興信所。採点対象となる項目数を4つの要素に集約して採点している東京商工リサーチ。項目ごとの採点結果とともに文章で根拠を書き記している信用交換所。他の信用調査機関が5段階評価で総合的な評価を記載しているのに対し、7段階の評価と総評をもつて総合評価としていた東亜興信所。信用調査機関ごとの基準で評価が点数化され、配点の構成や評価結果に

項目	東京商工	帝国興信	信用交換	東亜興信
資本金	2,016,000	3,691,000	1,976,000	3,494,000
従業員数	15	13	18	20
業容	A-3			

東京商工リサーチの
評点部分(1980年)
10項目に細分化されて
いた評価項目が、4つの
要素に集約されていた

項目	東京商工	帝国興信	信用交換	東亜興信
業容	10-2	7	7	7
業績	10-2	7	7	7
資産構成	10-1	7	7	7
経営能力	10-1	7	7	7

信用交換所の評点部分
(1980年)
「業容」「業績」「資産構成」
「経営能力」の各要素に、
所見の根拠が記されていた

項目	東京商工	帝国興信	信用交換	東亜興信
業容	10-1	7	7	7
業績	10-1	7	7	7
資産構成	10-1	7	7	7
経営能力	10-1	7	7	7
総合世評	10-1	7	7	7
総合	100-9	43		

東亜興信所の評点部分
(1978年)
総合評価には各項目の合計
点数により、CA、CB、
CC、CC(白抜)、CD、CD
(白抜)、CEの7段階で格付
けられた評価が記入された

信用程度	配点
A 優良	100-86
B やや優良	85-71
C 多少不安	70-51
D 若干不安	50-31
E 警戒	30以下

信用要素	所見	評点
資本構成	12-0	7
業容	10-2	7
業績	5-1	7
取引関係	7-0	7
取引関係	10-2	7
資金状況	16-0	7
経営能力	10-1	7
将来性	10-1	7
経営者信用	10-1	7
総合世評	10-1	7
総合	100-9	43

帝国興信所の評点部分(1978年)
「評点方式」採用当初と比べると、「既往の業績」「取引関係」項目の配点が上がり、「業容」「総合世評」項目の配点が下がっていた

も違いが出ている。これらの主要信用調査機関で作られた調査報告書に共通して言えることは、「評点方式」導入当初と比べ、項目内容や総合的な評価などの改善、整理を行ったことである。第三者の客観的な評価として与信判断に活用しやすいように、信用調査機関の評価手法も時代や顧客のニーズに合わせて変化を遂げてきたのである。

大鉄傘に溢れるほどの大盛会

— 日頃の感謝を込めた一大イベント —

右の写真は、1930（昭和5）年に創業30周年を迎えた帝国興信所の記念式典の様子を映した一枚である。場所は、1909年から45年の東京大空襲まで、戦前の相撲ファンに愛された当時の両国国技館である。今から78年前の5月19日、帝国興信所の30周年記念式典は 大相撲の興業施設として知られ、斬新なそのデザインから“大鉄傘”の愛称で親しまれていた両国国技館を貸し切って行われた。

写真には、舞台中央で帝国興信所の創業者、後藤武夫が挨拶文を読み上げている姿が納められている。周りを取り囲むように客席には、大勢の人達が見える。加盟会員、各国大使、官公庁、学校、新聞雑誌社など、1万5,000名を超える招待客が集まり、開会の時点で会場はほぼ満員であったという。驚くのは招待客の数だけでなく、来賓やお祝いのコメントを寄せた人達の顔ぶれである。祝辞の演説を述べた清浦圭吾（第23代内閣総理大臣）や徳富蘇峰（明治から昭和にかけて活躍したジャーナリスト）をはじめ、時の内閣総理大臣、浜口雄幸や大蔵大臣の井上準之助など、各界の著名人の名前が並んだ。

祝賀会閉会後は、余興として大相撲協会の力士全員による本場所同様の取組が行われた。当時の大相撲は、28（昭和3）年より始まったラジオ放送の影響もあり、初場所の千秋楽で18



年ぶりに満員になるなど国技としての人気を取り戻しつつあった時期である。この時の盛り上がり様子は、各紙にも取り上げられ、『中外商業日報』（現・日本経済新聞）では、「会するものは大鉄傘に溢るばかりで盛会であった」と報じている。

この式典の参会者には、記念品として清浦圭吾が「至誠努力」と揮毫した扇子などが配られた。この言葉は、創業時に後藤武夫が掲げたもので、現在でも帝国データバンクの経営の信条として受け継がれている。

史料館 TOPICS

かつての大企業の調査報告書 デジタル複写で入手

帝国興信所時代に調査した「合名会社鈴木商店」調査報告書のデジタル複写を新たに入手した。鈴木商店は、1874（明治7）年に個人商店として神戸で創業し、半世紀あまりで世界的な商社に急成長した大企業である。1927（昭和2）年の金融恐慌により破綻したが、一時は神戸製鉄所を系列に持ち、双日のルーツのひとつとして現在でも知られている。今回入手した資料は、1917（大正6）年12月に三菱（資）査業部に報告したもので、鈴木商店系列企業を調査した約200ページの大部。原本は東京大学経済学部図書館に所蔵されている。



ご利用案内

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介します。

<http://www.tdb-muse.jp/>

開館のご案内

[開館時間] 10:00～16:30(入館は16:00まで) [休館日] 土・日・月曜日および祝日 / 年末年始(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。) [入館料] 無料

交通のご案内

[JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅から徒歩8分 / 中央線 四ツ谷駅四ツ谷口から徒歩9分

[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分 / 都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分 / 丸の内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分



帝国データバンク史料館だより Muse Vol.07 2009年2月発行

<http://www.tdb-muse.jp/>

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8 TEL. 03-5919-9600(直通) ※ご来館の際は、1F受付にお越し下さい。